

中欧か東欧か、その多言語性について

西 成彦 (立命館大学)

1

私がポーランド文学の研究を始めたのは1970年代の後半で、まだまだ「東西冷戦」の行く末など見えない時代でした。また、ちょうど恒文社から『現代東欧文学全集』が刊行されたばかりの時代ですから、「東ドイツ」を「東欧」に含めるかどうかという問題はあったにせよ、ヨーロッパには「西欧」と「東欧」と、そしてそのさらに東に「ソ連邦」が君臨するという地政学的認識が支配的でした。私が柴さんや大津留さんと出逢った時代とはそういう時代でした。

ただ、歴史を古代・中世にまで遡ると、「ローマ帝国」の分裂にともなうキリスト教の「東西分裂」に絡めて、「東西キリスト教」の接合・隣接を過去に持つ領域という別の意味づけが可能だった気もします。つまり「東西冷戦」という歴史的条件のなかで、「東欧とは何か」をひとは深く深く考えようとしていた。そういう時代があったのです。

しかし、「東西冷戦」という状況が崩れると、そういった「東欧論」は鳴りをひそめ、そういうことを考えるだけなら「中欧」で何が悪いかという議論が前面に出てきた。

エルベ河とドナウ河の分水嶺に近かったボヘミア地方が「中欧のなかの中欧」であるという認識は、長いタイムスパンで見ると、たしかにもっともなるものではあったのです。「ロシア史」と「東欧史」は、経済学者にとっては一体化したものでしたが、歴史研究、文学研究では、そこにははっきりとした線引きがあったからです。

他方、ナポレオン戦争あたりまで遡ることができるのだと思いますが、ロシアとフランスを「東西」の極において、ドイツ諸邦を「中間ヨーロッパ」 *Mitteleuropa* と呼びならわすようになったというもうひとつの文脈が存在します。第一次及び第二次大戦でのドイツは、まさに「中間ヨーロッパ」の位置から、「ヨーロッパの中央」へのし上がろうという野心をあらわにしたとも言えるでしょう。そして、ドイツの二度の敗戦が、こうした意味での「中間ヨーロッパ」の消滅を引き起こし、「東西冷戦」の時代の幕が開かれたのでした。

要するに「中欧」という概念は、その土地住民の自己認識のなかから生れ、しかしそれは「東西冷戦」の結果として、一度は封印されたということなのかもしれません。そして、ベルリンの壁の崩壊後、その封印が解かれて、「ドイツ＝中欧」というのではない、さまざまな「中欧論」がいま花盛りになりつつあるということなのだとは私は理解しています。

もっとも、21世紀に入ってから、ロシアを「中心」に置く形での「ユーラシア」という概念が強まってきていることもあり、そうすると「ヨーロッパ」と「アジア」の「中間」に位置すると自称できる位置にあるのは、異論の余地もなく「ロシア」だということになります。「中間」、そして「中心」という概念は、いまやロシアによっても主張されるようになってきているということなのでしょう。この構想のなかでは、もはや「ヨーロッパ」は「大きな半島」にすぎないことになり、「中欧」という概念に大きな意味はないことになってしまいます。

そうしたなかで、私はこのところ南北アメリカの東欧系移民に強い関心を持つようになってきていることもあり、ここではまず、「大西洋の向こう岸から見たヨーロッパ」という観点から、「東欧か中欧か」という議論を整理してみようと思います。

2

コロンブス以降の「大航海時代」以降、スペイン・ポルトガルといった大西洋に面した国々が西へ、そして南の喜望峰をまわって東へと、富の増大を狙った海洋進出に乗り出しました。その後、オランダ・フランス・英国といった国々も、海賊行為や奴隷取引に手を染めるなどして、利益争奪戦に参入します。こうした植民地主義的な野心を持った国々は、通常、「西欧」に属します。要するに、南北アメリカ大陸の先住民族が最初に目にした「ヨーロッパ人」は「大西洋に面した西側ヨーロッパ」の人々だったということです。もちろん、そのなかにはドイツ人や北欧の探検家なども含まれはしたのですが、少なくとも領土的野心をもって南北アメリカに群がったのは「西部ヨーロッパ」の人びとでした。

ところがアメリカ合衆国の独立を契機に、ラテンアメリカ地域でも地域独立の動きが高まった19世紀、宗主国からの自立を推し進めようとしたアメリカ諸国では、経済的な繁栄を追求する上での「良質な労働力」を必要とするようになります。なかでも、奴隷制に深く依存していたブラジルなどは、そうした奴隷制と共犯関係にあった西洋列強の「白人」ではない、「より白い白人」の受

け入れに積極的な姿勢を示し始めます。そこで白羽の矢が当たったのが「中欧」の農民たちでした。ナポレオン戦争による荒廃や、産業革命の進行にともなう農村の疲弊もあって、新天地での転身を夢見ていたドイツ諸邦（およびスイス）のドイツ人が次々に海を渡ります。その頃はまだまだドイツの海運業は未成熟でしたから、ルアーヴルやアントワープの港からの船出でしたし、統一前のドイツは領土的な野心をむき出しにするには至っていませんでしたから、アメリカ諸国にとって、ドイツ人は「理想的」な移民としてイメージされたのです。

しかし、そうするうちに、ドイツにおける産業革命の進歩は、海運業の発達や鉄道敷設を通じて、ドイツ諸邦に限らず、その「後背地」にあたる「東方」からも移民を集め、それを新しく近代化されたハンブルクやブレーメンの港から送り出すようになるのです。いま「後背地」という言葉で示したのですが、プロイセン＝ドイツの統一と並行して、ドイツの鉄道と船舶は、ロシア領やハプスブルク帝国領の諸民族にも「移住」を呼びかけ、そして大量の移民を大西洋の向こう側へと送り出すことができる力を蓄えるに至ったのです（1884年の「ベルリン会議」以降、ドイツは自国の海外植民地への移民に新しい希望を見出すようになったという時代背景も考慮に入れる必要があるでしょう）。

「ドイツの船でやってきながらもドイツ人ではないひとびと」——大西洋の向こう岸の人びとには、それが「東欧人」でした。そこにはリトアニア人やラトヴィア人から、ルーマニア人までが含まれ、また「アシュケナーズ系ユダヤ人」もまた、数多く含まれていました。そして、そうした「東欧からの移民」の使用言語はまちまちでした。

フランツ・カフカの『失踪者』の主人公は「プラハのドイツ人」という設定ですが、ニューヨーク行きの船の中には怪しげな「スロヴァキア人」が混じっていました。また、大西洋横断航路の船になかには、「ルーマニア人」の釜焚きも含まれていて、主人公のカール・ロスマンは、ドイツ人から差別を受ける彼らに同情を示しつつも、しかし、自分が「ドイツ人」であるというプライドは失いたくないという微妙な位置に立たされます。それが19世紀後半から20世紀初めにかけての「新移民」たちでした。

こうした観点からすると、「東欧」とは「中欧」であるドイツの「後背地」であり、民族国家の成立が遅れていた「東欧」におけるエスニシティは、国民国家という後ろ盾を持たないまま、ただその日常言語によってだけ規定されるもの（ナショナリティ以前のもの）でした。彼らがお互いに助け合えるとしたら、当面は「使用言語」を同じくする仲間同士の助け合いに頼るしかなかった。

ですから、「東欧人」は、「ドイツ人＝中欧人」のそれとは、どこかで切り離されたアイデンティティを内に秘めながら、新天地での生活を開始したのです。言い方を変えれば、19世紀末の南北アメリカでは、「本国を持たない、さまよえる東欧人」が「東欧」という抽象的な概念に内実を与えていたということになります。

3

じつは、この「ドイツ人の集住地域」の「東側」という意味での「東欧」は、「ドイツのユダヤ人」が、ポーランド以北・以東のユダヤ人を「東方ユダヤ人」*Ostjuden*と呼ぶのにもぴったり対応していました。この場合、「東方ユダヤ人」にとっての「母語」がたいていの場合、イディッシュ語であったのに対して、「母語」をドイツ語（や、あるいはオランダ語や、フランス語）とするユダヤ人を「西方ユダヤ人」と呼ぶことが前提になるのですが、要するに、支配国家の言語（「ロシア帝国」のロシア語や、「ハプスブルク帝国」のドイツ語）などへの言語的同化や、地域言語としてのリトアニア語やポーランド語やウクライナ語への言語的同化が、いずれも十分ではなく、必然的な結果として、ユダヤ人の言語的生活が、多言語的であることを強いられていた地域が「東欧」だったというわけです。哲学者のジャック・デリダが『他者の単一言語使用』*Monolinguisme de l'autre* (1996) という本のなかで用いた表現を用いれば、「西方ユダヤ人」が言語的な「引き算」を受けた結果、「国語」への「同化」に抵抗する術を持たなかったのと比べた場合、「東欧のユダヤ人」の方は、「東欧ならではの多言語性」のなかで「ポリグロットとしての生」をいまだ享受していたと言ってもいいのです。

私は、ウクライナ出身のイディッシュ語作家、ショレム・アレイヘムの『牛乳屋テヴィエ』を訳してみても痛感したのですが、そのテキストは、イディッシュ語とヘブライ語という、きわめてユダヤ的なダイグロシヤに加えて、ロシア語やウクライナ語やポーランド語とのコードスイッチングをも含んだアクロバチックなものでした。またアイザック・バシェヴィス・シンガーの作品の場合にも、ポーランド語やドイツ語とのコードスイッチングは顕著です。

そして、「ホロコースト」以前には1000万人近いユダヤ人を擁したのが、「東欧」（そこにはベラルーシやウクライナも含まれます）でした。しかも、ドイツの「後背地」としての「東欧」には、中世後期以来の「東方植民」の結果として、同じく1000万人近いドイツ人が「歴史的」に居住していたのです。「大ドイツ主義」を掲げたナチス第三帝国が、「民族ドイツ人」*Volksdeutsche*の解放を実現すべく進駐した地域が、まさに「東方ユダヤ人」の同じく「歴史

的」な居住地域と重なりあっていたこと。「ホロコースト」の被害が想像を絶する規模にまで膨れ上がったのは、こうした「ドイツ人とユダヤ人がともに少数民族として共存しあっていた東欧」というファクトが存在したからだとは思っています。

4

少し話を先に進めすぎてしまったようなので、第一次大戦後にまで戻ってみたいと思いますが、「東欧諸国」という概念が成立する前の「東欧人」なるものに新しい時代が訪れるのが、まさに第一次世界大戦後でした。アメリカ大陸の「東欧人」の多くは、そこでようやく「祖国」というものを手に入れるのです。

もっとも1918年以降に成立した国々は、人口不足に苦しむよりは、むしろ慢性的な人口過剰に苦しんでいましたから、「移民」たちが「祖国」に戻っていくケースはきわめてまれでした。それどころか、新興諸国は、過去の実績を踏まえながら、さらなる移民送出に国を挙げて乗り出すということにさえなりました。

また、ロシア革命後の「旧ロシア」や、民族主義の強まった「東欧諸国」では、反ユダヤ主義的な傾向が強まりましたから、ユダヤ系の「難民」が、「東欧系の移民」として海を渡るという東から西への移民ラッシュには、かえって拍車がかかりました。

そして、このようにしてできあがった「東欧イメージ」は、第二次大戦後の「東西冷戦」のなかで、できあがった地政学的な「東欧」にも継承されたのでした。

社会主義化した「東欧」から、今度は「移民」emigrantとしてではなく、「亡命者」exileとしての移住者が後を絶たなかったからです。アメリカ大陸の国々の目から見た「東欧」ということにこだわるなら、政治的な不安定さが理由で持続的に「移民」を送出する「ドイツの向こう」の国々としての「東欧」は、少なくとも、冷戦終結までは、きわめて輪郭のはっきりしたものだったということです。そして、彼らは英語やドイツ語とも、スペイン語やポルトガル語とも違った言語を「母語」とする人びとでした。

今でこそ英語を話す「東欧人」は増えていますから、「EU統合」とは異なる水準で、言語的多様性という「東欧」の特徴は、希釈されつつあると言えるの

かもしれません。しかし、いかに「西欧言語」のヘゲモニーが増大しようと、「東欧の固有言語」が生き延びるかぎり、「東欧諸国」は「EU」のなかにおいても「東欧」的な言語生活を維持しつづけるのではないかと思います。

そして、「国語」による「一言語支配」に染まり得なかった土地としての「東欧」こそが、少なくともこの数百年のこの地域の「よき伝統」であったという考え方が、「東欧出身」の作家たちのなかには広く行き渡っている。これは事実なのではないでしょうか。

クンデラたちが、カフカとハシェックを同じ伝統に位置づけながら「中欧」と呼ぼうとしているという現象は、私からすれば、チェコもまた「東欧」だと言っているに等しいように思えてならないのです。強いて言えば、さきほど申し上げたユダヤ人の場合、チェコのユダヤ人は、まさにカフカの世代からは「東方ユダヤ人」ではなく「西方ユダヤ人」に移行しつつあった。その意味で、カフカを「東方ユダヤ人」とは呼べず、であればこそ、1911年にカフカが目の当たりにした「イディッシュ演劇」の衝撃は、カフカにとって決定的なものでした。ともかく、ウィーンによりも西に位置するチェコの場合は、とりわけその位置づけが難しい。このことだけは確認しておきましょう。

5

ところで、もし私が監修して「20世紀東欧文学全集」なるものを編ませてもらえるとしたら、そのときに、たとえばこの100年をふり返りながら「東欧文学全集」を編むなら、ヨーゼフ・ロートやパウル・ツェラーン、ブルーノ・シュルツやダニロ・キッシュ、さらにはアイザック・バシェヴィス・シンガーのようなユダヤ系の作家や詩人をそこから排除することはありえないでしょう。また、非ユダヤ系でも、ギュンター・グラスやヨハネス・ボプロフスキ、ヘルタ・ミュラーのような作家は、かりにドイツ語で書く場合でも、「中欧作家」というよりは「東欧作家」としての自覚を強く有した作家だという意味で、「全集」には名を列ねるに値すると思います。【補足——じつはもうすぐ『東欧の想像力』という「東欧文学ハンドブック」が松籟社から出る予定なので（奥彩子・西成彦・沼野充義編）が、そこでは「東欧文学」の範囲を広めにとっています。】

ノーベル賞詩人のチェスワフ・ミウオシュは、UCバークレーでの講義録としてまとめられた『ポーランド文学史』（邦訳は未知谷）のなかで、「戦間期」をふり返りながら、《国民のかなりの比重を占めた、イディッシュ語、ベラルーシ語、ウクライナ語、ドイツ語などを日常語とする少数民族の問題が、激し

い衝突の原因になった》と述べています。これは、ポーランドの諸都市のなかでもとりわけ多言語的な色彩の強かったヴィルノ＝ヴィリニウスで学業を積み、詩人としての腕を磨いた詩人であったればこそその実感だったのでしょう。

さらに、ストックホルムでのノーベル賞受賞講演のなかで、彼はリトアニアのことを《さまざまな言語、さまざまな宗教が共存しあう土地》であったと美化して語り、《フィンランドにスウェーデン語を話す家庭があり、アイルランドに英語を話す家庭があるように、十六世紀以来、ポーランド語を話す家庭に生れた》と、みずからの来歴を都市の歴史に位置づけて語りました。同じノーベル賞詩人であるW・B・イェイツや、『ムーミン』でおなじみのトーヴェ・ヤンソンのことを念頭に置いた発言だったのでしょうか。スウェーデンの聴衆へのリップサービスもあったかもしれません。

事実、「戦間期」のヴィリニウスは、ポーランド語を公用語としていたものの、市内の各所でイディッシュ語やリトアニア語やベラルーシ語が飛び交う多言語都市でした。それこそ、ミウオシュがポーランド語詩人へと成長を遂げたのは、単純にヴィリニウス出身だったからではなく、まずは「ポーランド語を話す家庭に生れた」ことが決定的だったのです。

そして、米国に移り住んでからもポーランド語で詩を書きつづけ、しだいに「ヴィリニウスが産んだ世界的なポーランド語詩人」としての名声を得るなかで、彼は故郷の町との新たな出会い直しを経験します。1979年、彼はオランダのロッテルダムで開かれた会合で、イスラエル在住のアブラハム・スツケヴェルと同席します。ミウオシュは、若き日、ヴィルノ大学の仲間とともに詩誌『ジャガーリ』を創刊し、「水曜会」を称して定期的に朗読会を催すようになっていたのですが、その聴衆のなかに、スツケヴェルが混じっていたことを、本人の口から聞かされるのです。彼はミウオシュと同じく「戦間期」のヴィルノで詩人としてデビューを飾り、ドイツ軍占領時代をも生き延びた筋金入りのイディッシュ語詩人でした。「ジャガーリ」に対抗して、彼らは「若きヴィルネ」Yung Vilneを名乗っていました。この出会いというか、スツケヴェルにとっては再会に他ならなかったご対面は、ミウオシュのヴィルノに対する理解に決定的な修正を迫ったのです。

その後、ミウオシュは、このロッテルダムでの対話をふり返りながら、次のように書くこととなります——《あのころ、町はひとつではなく、ポーランド人の「ヴィルノ」とユダヤ人の「ヴィルネ」が辛うじて意思疎通を果たしていた。私は前者に属していて、私が住む目と鼻の先で書かれていたイディッシュ

語の書物に関してはまったくの無知であり、その意味で、しよせん、私は「ヴィルノ」の方の住民にすぎなかった。」

1980年、ミウオシュがノーベル賞を受賞したあたりから、「東欧」は激動の時代を迎えることになりましたが、「戦間期」をふり返ろうとする歴史家や作家のまなざしに、「少数民族問題」なるものを正確に見極めようとする意志が強くはたらくようになるのもこの頃です。ミウオシュは、スツケヴェルとの出会い直しを経て、まさに「ヴィルノ」Wilnoと「ヴィルネ」Vilneの和解に手を差し伸べようとする一人となったのでした。

ここで私はミウオシュの例を挙げたにすぎませんが、私がきわめて「東欧的」だと考える作家たちは、「多言語使用地域」で培った世界観を未来に向けて継承しようとするような作家たちです。

したがって、私が今日「東欧」の名で読んだ国々を代表する文学が、もはや「単一言語使用」を背景にした文学しか産み出さなくなってしまったとき、おそらく「東欧」の火は消えるのです。この「呼称」は、ですから賞味期限を有するものでしかないかもしれないと思っています。

しかし、「東欧」という概念はいまだ賞味期限が切れているとは思いません。私はジョーゼフ・コンラッドの「東欧性」を考えるときに、彼が小説の舞台とした船の上や、「東印度」あるいは「ブラック・アフリカ」あるいは「ラテンアメリカ」の「港町」といったトポスは、彼が生れ育ったロシア領ウクライナの多言語空間を彷彿とさせるものであるという特徴に注目しています。ただ、彼は歴史的に《ポーランド語を話す家庭に生れた》にもかかわらず、自身にとっては第三言語でしかなかった英語で書いた。それがゆえに彼は「大英帝国の作家」になりえたのですが、私にとってはコンラッドもまた、ミウオシュが「東欧の詩人」であるのと同じく、「東欧の作家」なのです。

そして、21世紀に入った今現在を考えるなら、過去の「東欧」を特徴づけていた「多言語使用」の現実は、「西欧」の国々を考えるときにこそ重要なものになりつつあるようにも思います。またドイツは、昨今のシリア難民の受け入れなどに見られるように、「他者に対して開かれた移民国家」としての独自色を積極的に打ち出そうとさえしています。旧植民地からの流入者が「移民・難民」の主流を占めるイギリス、フランスやオランダなどの国々と、ドイツの違いは、しっかりと認識しておく必要があるでしょう。他方、シリア難民を通過させることはしても、自国に留まらせることには積極的でないのが「東欧」の

国々だということも、21世紀の現実をはっきりと示しています。

つまり、ある意味での皮肉が存在するのです。ドイツから西側の国々こそが、いままさに「多言語・多文化性」を打ち出す必要に迫られ、逆に、「東欧」の国々は「単一言語使用」+「英語習得の活発化」という単純な言語経験のなかで自足する国々になりはじめている。そして、表面では「古きよきヨーロッパ」を守ろうとしていながら、今さらのように「国民国家」の均質性を夢見るに至っているのが、今の「東欧」なのです。

「東欧」が、ロシア帝国・ドイツ帝国・ハプスブルク帝国・オスマン帝国による分割に委ねられていた19世紀から、両大戦間期の「東欧国民国家」の乱立を経て、さらに第二次大戦後に大規模な住民交換を経験した上で、社会主義時代には少数民族問題そのものが政治的な問題から外されるようになり、そして、今日の「東欧」へと至っている。この一世紀半をどう捉えるのか？

「東欧」は「東欧らしさ」を克服することで、「東欧」としての使命を終えつつあると言うべきでしょうか？ そして、その途上で、かつて「東欧らしさ」を支えていた「東方ユダヤ人」の百万単位での「絶滅」が、その傾向を加速させた。「東欧の20世紀」を考えるという課題は、さまざまな意味で、「東欧らしさ」の大きなうねりを考えるということでもあるはずです。

「問いとしての東欧」なるものは、まだまだ私たちの前からかき消されてはいないと言うべきでしょう。そして、さらに加えて言うと、ドイツ・オーストリア・イタリアといった「中央ヨーロッパ諸国」は「東欧」との隣接性という運命との闘いをいまだに続けているような気がしてなりません。ベルリン、ウィーン、トリエステ・・・ それどころか、今日、最も「東欧的」なのは、プラハやブダペシュトやクラクフよりも、そういった諸都市だと言うべきかもしれないですね。